読む・百人一首041

壬生忠見

恋すてふ
わが名はまだき
立ちにけり
人知れずこそ
思ひそめしか

こひすてふ
わがなはまだき
たちにけり
ひとしれずこそ
おもひそめしか

読む・百人一首042

清原元輔

契りきな
かたみに袖を
しぼりつつ
末の松山
波越さじとは

ちぎりきな
かたみにそでを
しぼりつつ
すゑのまつやま
なみこさじとは

読む・百人一首043

権中納言敦忠

逢ひ見ての
のちの心に
くらぶれば
昔は物を
思はざりけり

あひみての
のちのこころに
くらぶれば
むかしはものを
おもはざりけり

読む・百人一首044

中納言朝忠

逢ふことの
絶えてしなくは
なかなかに
人をも身をも
恨みざらまし

あふことの
たえてしなくは
なかなかに
ひとをもみをも
うらみざらまし

読む・百人一首045

謙徳公

あはれとも
いふべき人は
思ほえで
身のいたづらに
なりぬべきかな

あはれとも
いふべきひとは
おもほえで
みのいたづらに
なりぬべきかな

読む・百人一首046

曽禰好忠

由良のとを
わたる舟人
かぢをたえ
ゆくへも知らぬ
恋の道かな

ゆらのとを
わたるふなびと
かぢをたえ
ゆくへもしらぬ
こひのみちかな

読む・百人一首047

恵慶法師

八重むぐら
しげれる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋は来にけり

やへむぐら
しげれるやどの
さびしきに
ひとこそみえね
あきはきにけり

読む・百人一首048

源重之

風をいたみ
岩うつ波の
おのれのみ
くだけて物を
思ふころかな

かぜをいたみ
いはうつなみの
おのれのみ
くだけてものを
おもふころかな

読む・百人一首049

大中臣能宣朝臣

みかきもり
衛士のたく火の
夜は燃え
昼は消えつつ
ものをこそ思へ

みかきもり
ゑじのたくひの
よるはもえ
ひるはきえつつ
ものをこそおもへ

読む・百人一首050

藤原義孝

君がため
惜しからざりし
いのちさへ
長くもがなと
思ひけるかな

きみがため
をしからざりし
いのちさへ
ながくもがなと
おもひけるかな

読む・百人一首051

藤原実方朝臣

かくとだに
えやはいぶきの
さしも草
さしも知らじな
燃ゆる思ひを

かくとだに
えやはいぶきの
さしもぐさ
さしもしらじな
もゆるおもひを

読む・百人一首052

藤原道信朝臣

明けぬれば
暮るるものとは
知りながら
なほうらめしき
朝ぼらけかな

あけぬれば
くるるものとは
しりながら
なほうらめしき
あさぼらけかな

読む・百人一首 053

右大将道綱母

嘆きつつ
ひとりぬる夜の
明くる間は
いかに久しき
ものとかは知る

なげきつつ
ひとりぬるよの
あくるまは
いかにひさしき
ものとかはしる

読む・百人一首 054

儀同三司母

忘れじの
ゆく末までは
かたければ
今日をかぎりの
いのちともがな

わすれじの
ゆくすゑまでは
かたければ
けふをかぎりの
いのちともがな

読む・百人一首 055

大納言公任

滝の音は
絶えて久しく
なりぬれど
名こそ流れて
なほ聞こえけれ

たきのおとは
たえてひさしく
なりぬれど
なこそながれて
なほきこえけれ

読む・百人一首 056

和泉式部

あらざらむ
この世のほかの
思ひ出に
今ひとたびの
逢ふこともがな

あらざらむ
このよのほかの
おもひでに
いまひとたびの
あふこともがな

読む・百人一首057

紫式部

めぐりあひて
見しやそれとも
わかぬ間に
雲がくれにし
夜半の月かな

めぐりあひて
みしやそれとも
わかぬまに
くもがくれにし
よはのつきかな

読む・百人一首058

大弐三位

ありま山
ゐなの笹原
風吹けば
いでそよ人を
忘れやはする

ありまやま
ゐなのささはら
かぜふけば
いでそよひとを
わすれやはする

読む・百人一首059

赤染衛門

やすらはで
寝なましものを
さ夜更けて
かたぶくまでの
月を見しかな

やすらはで
ねなましものを
さよふけて
かたぶくまでの
つきをみしかな

読む・百人一首060

小式部内侍

大江山
いく野の道の
遠ければ
まだふみも見ず
天の橋立

おほえやま
いくののみちの
とほければ
まだふみもみず
あまのはしだて